文部科学省令和8年度日本語教師養成・研修推進拠点整備事業
北海道・東北ブロック日本語教師養成実施機関連絡協議会

日本語教育を学ぶ学生のためのHoT-JeT合宿2026

私たちが見た日本語教育の現場と魅力　～大崎市立おおさき日本語学校～

2026年8月26～27日、北海道・東北地域の大学で日本語教育を学ぶ大学生・大学院生12名が宮城に集まり、合宿を行いました。合宿では、大崎市にある大崎市立おおさき日本語学校を訪問させていただきました。学校や授業の様子を見学し、日本語教師の方々に直接お話を伺うことで、日本語教育の実際の現場とその魅力を学ぶ貴重な機会となりました。本記事では、その体験を学生の視点からご紹介します。

学校の概要・特色

認定日本語教育機関　大崎市立おおさき日本語学校　https://www.osaki-jls.com/



おおさき日本語学校は2025年4月に開校した日本で唯一の公立かつ認定日本語教育機関です（2026年8月現在）。

学校がある大崎市は宮城県北西部に位置し、人口約12万人の宮城県で3番目に大きい町です。自然豊かで、魅力あふれる大崎市にあるおおさき日本語学校は、学習と活動の場を地域全体へと広げ、地域住民との様々な交流を通して日本語だけでなく、風土や文化を深く理解できる人材の養成を目指しています。

2026年4月時点で台湾、ベトナム、インドネシアから集まった58名の学習者が在籍しています。2025年度の卒業生16名のうち、7名が就職し、3名が進学しました。就職者のうち5名は宮城県内の企業で活躍しています。

課程は進学2年課程、進学1年6か月課程、進学1年課程の3つです。いずれの課程でも到達目標は、具体・抽象を問わない話題において複雑なテキストの主要な内容を理解したり、緊張しないで流ちょうかつ自然に日本語話者とやり取りできたりするレベル、「日本語教育の参照枠」（文化審議会国語分科会、2021）でいうB2です。目標に向けて、「日本語総合」「文法」「読解」など全15科目がカリキュラムとして組まれています。

地域の方と交わる機会が多く設けられているのがおおさき日本語学校の特色です。15科目の中には、「Oタイム（オータイム）」という地域の人と交流する科目があります。科目名は「大崎」や「オリジナリティ」などの頭文字になぞらえて名づけられました。「Oタイム」では、近隣の小学生との田植え体験や近隣高校との交流会、公民館でのずんだ料理賞味会などの活動が行われており、学習者にとっては地域や社会に開かれた学びの場です。地域住民側にも「Oタイム」は好評で、学校と地域が定期的に交流できる多文化共生社会の実現の一端を担っています。他にも、地域の方々で組織した有志の会がおにぎりやお惣菜を作り、昼休みに学校で販売しています。

おおさき日本語学校は、2023年に廃校になった旧西古川小学校を校舎として使っているため、校内は当時の面影を残しつつも、ICTを積極的に導入した内装になっています。黒板にマグネットタイプのホワイトボードシートを貼り、プロジェクターを映せるようにしたり、専用のペンで文字を書いたりできるようにしています。お祈りのスペースや体を清めるための設備もあり、宗教面にも配慮がなされています。

多読の授業などで使われる図書室には初級から上級レベルまでの約800冊の本が揃えられ、絵本やマンガ、歴史の本など様々な本があります。定期的に本を買い足し、学習者が飽きない工夫を施しています。

豊かな自然と整えられた校舎環境に加え、地域交流を通じて教室外の生きた日本語に触れる機会が常に存在するおおさき日本語学校は、学習者にとって理想的な学習環境だと感じました。

授業見学

今回は、中上級の「語彙」、初中級の「読解総合」と「多読」のクラスを見学しました。

思考を促し、価値観の違いに触れる―「語彙」の授業―



中上級の「語彙」では、2つのクラスの授業を見学しました。どちらのクラスでも、授業冒頭にスマートフォンで二次元コードを読み取ったり、GoogleFormsを活用したりと、ICTを取り入れた確認テストや復習が行われていました。学習者の誤りが多い点をクラス全体で共有、解説しながら、スムーズに授業に入っていく様子が見られました。

2つのクラスに共通して、学習者が安心して発話できる雰囲気作りと学習者自らの思考を促す丁寧な問いかけが印象に残りました。教師は基本的に丁寧体で話しながらも、個人へ質問するときには柔らかい口調で接し、学習者が答えに詰まった際には、反対語や関連語から考えさせるなど、直接答えを与えず、思考を導くようにしていました。また、教師が学習者に説明するときには、具体的な状況を設定して「どのような場面で」「どの表現を用いるのが適切なのか」が学習者に伝わるように授業をしていました。見学した授業では、人物を形容する「礼儀正しい」という語の導入がありました。その際、教師が「日本でいう礼儀正しい人はどういう人ですか」と学習者に問いかける場面も見られました。このような問いかけは、単に単語を暗記するのではなく、実際にその単語が使用される文脈や、日本語学習者の持つ価値観と日本人との考え方の違いに気付かせることにつながっているのではないかと思いました。授業全体を通じて、教師陣は知識を伝えるだけでなく、学習者と共に考え、理解を深める場を設計することを意識されているように感じました。

学習者が自分で読み進める―「多読」の授業―



初中級の「多読」クラスで、特に印象的だったのは学習者が誰一人として話すことなく、集中して取り組む姿勢が見られたことです。授業開始とともに学習者は、本棚に向かい、自分のレベルや関心に合った本を選んでいました。本棚には、絵本、漫画、エッセイなど様々な種類の本があり、中には日本の震災や戦争に関する本も置かれていました。これは、「学習者に日本について興味を持ってほしい」という願いから厳選しているとのことでした。学習者は、自分の席で本を読み進める中で、あとで調べる語彙を一つひとつ自分のノートに書き込んだり、教師に内容を質問したりしていました。「多読の時間は、教える人ではなく支援者であることを意識している」というS先生は、一人ひとりの様子を見守り、必要に応じた声かけをしていました。授業全体を通じて、学習者の自主性を尊重した授業が実践されていると感じました。

コミュニケーションを大切にしながら読む―「読解総合」の授業―

初中級の「読解総合」クラスでは、教材に、『THE GREAT JAPANESE 30の物語 初中級』（くろしお出版、2019）が使用されていました。学習者は13名で、現在はB1レベル、秋からはB2レベルの授業に入るとのことでした。対話を重視していて、和気あいあいとした雰囲気で授業が進んでいたのが印象的でした。教師が「〇〇は何？」と問いかけると、学習者たちが口々に答えていました。一方、教科書の問題を解くときの学習者の表情は真剣で、集中していました。

教師は、学習者のレベルに合わせ、説明を調節しており、途中には、「推し」のような最近の流行語を導入する様子が見られました。学習者の学びを意識した教師の工夫や、クラスのあたたかな関係が随所に感じられ、学びやすい環境が整えられていると思いました。

講師インタビュー

「学習者の視点に立つこと」

日本語教師を目指す学生が今のうちにしておくべきことはあるかお聞きしたところ、海外経験を積んでおくことだと話してくださったのは、T先生です。日本語教師として異なる背景をもつ学習者を尊重するという点において、実際に海外に赴き、その国の国民性や文化を深く知るという体験をしておくことは大いに役立つとおっしゃっていました。さらに、教師自らが海外で困難に直面した経験があれば、日本にいる学習者が困るであろうことに対しても共感でき、適切なサポートに繋げることができるというメリットもあるそうです。日本語教育以外でも様々な経験を積むことで、学習者の日本での生活や卒業後を見据えたアドバイスができるようになり、将来的に日本語学校で勤務するうえで大きな強みになると感じました。

また、授業づくりについてもお話を伺いました。教案を作成する際には、新しく生まれた言葉だけでなく、時代とともに意味や使われ方が変化した言葉なども取り入れ、現在使われている日本語を教えることを意識しているそうです。スライドを作る際には、視覚的に見やすく、学習者の頭に残りやすいデザインにしているとのことでした。さらに、日本語教師としてのやりがいについては、自分の教えたことが学習者の生活の中で活きていると感じたときや、地域との関わりの中で学習者の姿を見ることにあるそうです。おおさき日本語学校の学習者がこの学校を選んだ理由も、静かな環境で学びたいという希望や、都会にも近いという立地の良さなどであると伺いました。今回のお話から、常に学習者の立場に立ち、実際の生活や時代に沿って学習者が使える日本語を届けようとすることの重要性を感じました。

「常にアップデートし続ける」

インタビューを通して、D先生の常にアップデートしていく姿勢が強く印象に残りました。D先生は、趣味をたくさん持っていることが、学習者とのコミュニケーションのきっかけにつながるとおっしゃっていました。また、学習者の趣味に合わせて、漫画やアニメを見て学ぶこともあるそうです。会話の中で、最初はうまく話せなかった学習者が、スマホなどで調べることなく、自分の言いたいことを自分の言葉で話せるように成長していく姿を見ることが、先生のやりがいに繋がっているそうです。

D先生は、予想外の質問など、想定していなかった出来事にも柔軟に対応できるよう、授業内容をあえて細かく決めすぎないようにしているそうです。授業中に予想外の質問を受けた際には、教師一人で考えるだけでなく、クラスの学習者に意見を求めたり、その質問をクラス全体で共有したりすることで、学習者からも学びを得ることができるとおっしゃっていました。このような柔軟な対応が、学習者との信頼関係につながるのだと感じました。

また、長期休みをスキルアップの機会として捉え、休みの日に勉強したり、研修会に参加したりしているそうです。常に新しいことを学び、アップデートし続ける姿勢が、より良い授業につながっているのだと感じました。

「不確定なことを楽しみ、情熱を持って」

日本語教師として長年の経験があり、カリキュラム作成にも携わっているS先生にもインタビューさせていただきました。日本語教師という職業を選んだきっかけの一つとして「不確定要素が多いこと」とおっしゃっていたのが印象的でした。多様な学習者に対応する授業を模索すること自体が面白いとお話しされており、不確定なことを肯定的に捉える考え方に驚きました。授業に対する基本的な考え方は、設計をシンプルにし、学習者の反応に合わせて臨機応変に授業を展開することだそうです。また身近なロールモデルはいないものの、自らがロールモデルになれたらとおっしゃっていました。S先生の、教師としての芯のある行動理念の一端を知ることができたと感じます。

学校の立ち上げ時から関わられていたとのことで、カリキュラムだけでなく、校内の各部屋の名称や看板・施設内表示のデザインなども決めてこられたとのことでした。地域からの依頼や要望の一部は授業科目「Oタイム」の枠組みで受け入れることもあるそうですが、特に印象的だった活動は、学習者が地域の小学生に対して国際理解講座の講師を務めたことだそうです。地域柄、学校周辺の小学校では、子どもたちが国際感覚を身をもって学ぶ機会は多くないため、おおさき日本語学校の学習者がいたからこその活動であったと感じられたそうです。

日本語教師として向いている人をお聞きしたところ、特に向き不向きはなく、続けられる人だと考えていらっしゃいました。そして日本語教育を学ぶ人に対して「日本語教育の需要が高まっている。教師という形でなくとも学びを活かせる場所はたくさんあるから、選択肢を広げてほしい」とおっしゃっていました。先生の日本語教育に対する情熱や教師を目指す人たちへのエールが感じられました。

訪問の感想

今回の訪問を通して、これからの自分の将来について改めて考えるきっかけとなりました。実際に日本語教師として働いている先生方のお話を聞き、仕事のやりがいや大変さだけでなく、これまでどのような経験を積み、どのような思いで学習者と向き合っているのかを知ることができました。先生方の経験や言葉に触れる中で、これから自分がどのような人になりたいのかを考えるとともに、これからの自分の選択に勇気をもらいました。今回の学びをこれからの大学生活や将来の選択につなげ、自分自身も学び続けられる人でありたいと思います。
K.H.（北海道教育大学函館校）

今回初めて日本語学校を訪問し、実際の学校の様子や日本語を学ぶ学習者の姿を知ることができました。
特に印象に残ったのは、おおさき日本語学校が公立としての強みを活かし地域と連携した学習時間を設けている点です。日本語を学ぶだけでなく、地域とつながりながら学べる環境が魅力的でした。日本語を学ぶ学生たちが生き生きしている姿がとても印象に残り、日本語教員という仕事の魅力をより強く感じる合宿となりました。
M.S.（山形大学）

今回、初めて公立の日本語学校を見学してみて、自分の想像していた以上に授業の雰囲気が良く、驚きました。日本語学習者の方々の学習意欲や楽しそうに学習する姿を見て、教える側にとってのやりがいは学習者の成長が見られた時以外にもあることに気づきました。また、教える際の様々な工夫を垣間見ることができ、日本語教師としての一つの理想像をイメージすることができました。今回得ることのできたたくさんの学びや気づきを大切に今後も学習を進め、将来のキャリアに生かしていこうと思います。
M.S.（山形大学）

これまで、現場で働く日本語教師の方々に直接お話を聞く機会はなかったので、先生方から日本語教師のリアルな部分ややりがい、日本語教師を目指す私たちがもつべき心意気などをお聞きすることができ、大変勉強になりました。
また、実際の教室の雰囲気を見学した際、先生と学習者が和気あいあいとかけあいをしている様子が見られ、私たちまで笑顔になりました。学習者の方々が安心して勉強する環境が整えられていると感じました。
M.K.（岩手大学）

公立学校の実態や、先生方がどのような思いで仕事をされているかを間近で見ることができ、とても有意義な合宿でした。学習者の皆さんも元気で活動的なのが印象的でした。また、同じく日本語教育について学び、教師を将来の選択肢として考えている同年代の仲間と話す時間は、とても貴重だと感じました。今後も日本語教育に携わる1人の人間としてどうありたいかを考えるきっかけとなりました。
R.W.（東北大学）

日本語学校と言えば都会に存在し、机に向かって勉強というイメージが強かったのですが、今回の訪問で、新しいイメージを持ちました。特に地域とのつながりに驚き、公立の看板通り、学校が地域の一部を担っているんだと実感しました。地域の方々と交流する仕掛けが緻密で、生きた日本語に触れる機会が多く、日本そのものを学ぶ環境が整っていると感じました。学習者の楽しそうな表情も印象的で、今後このような日本語学校が増えると良いなと思いました。
M.E.（国際教養大学）

私は今回日本語学校を初めて見学して、たくさんの学びを得ることができました。実際に働いている日本語教師の方からの現場の声を聞くことで、日本語教師という仕事をより具体的にイメージすることができました。校舎見学では、学習者のみなさんが元気よく、熱心に授業に取り組んでいる姿や、学校が地域の方々との交流の機会を積極的に設けている点がとても印象的でした。文法や会話を学ぶだけでなく、実際の生活の中で日本語を使う経験を大切にしていることが分かりました。さらに、参加者のみなさんとの交流もとても有意義な時間となりました。
Y.A.（山形大学）

今回、初めて日本語学校を訪問し、実際の授業の様子や先生方のお話を聞くことができ、とても参考になりました。これまで日本語学校がどのようなものか、授業はどんな風に教えているのかすら分からなかったのですが、実際の現場を見学したことで、日本語教師としての仕事をより深く理解することができました。同じ日本語教師を目指す仲間たちとも出会い、交流することができてとても楽しく、有意義な合宿になりました。
M.Y.（山形大学）

今回の訪問を通して、「日本語教師に向いているのは続けられる人」という先生の言葉が深く印象に残っています。理想的な人物像を想定していましたが、多様な学習者がいるように、学習者が求める教師像もまた多様であり、「正解」はひとつではないことを学びました。また、「日本語教師以外にも日本語教育に関わるニーズは高まっているので、視野を広げるとよい」との言葉から、活躍の場が広がっていることを実感し、自分も柔軟に学び続けたいと思いました。
T.A.（東北学院大学）

これまで実際に現場を見学させていただいたことはなかったので、非常に勉強になりました。特に、学習者の皆さんと一緒に作り上げているような双方向的な授業であったことが印象に残りました。今回得た学びや気づきをもとに、日本語教育の実践面についてさらに学んでみたいと思いました。また、同じく日本語教育について学んでおり、様々な経験を積んできた仲間との交流を通して沢山の刺激を受けました。今後、自分も積極的に様々なことに挑戦し、学び続けていきたいと思います。
Y.K.（岩手大学）

特に印象的だったのは、「日本語教師になるために、学生のうちにしておいた方がいいこと」をお聞きした際、S先生が「身体を鍛えること（基礎体力）と家事（マルチタスク）」と話してくださったことです。一見、日本語教育と関係のないことでも、それらは将来、自身やこれから出会う人の＋1につながってくるものかもしれません。日常から様々なことに興味をもち、その一つ一つに対して、どうすれば上手くいくのかを模索していきたいと思います。
T.H.（東北大学）

おおさき日本語学校の、地域一丸となって学習者をサポートする環境がとても印象に残りました。公立の日本語学校だからこその魅力を現場で体感し、そこで活躍する先生方や日本語学習に奮闘する学習者の皆さんと交流できたことはとても貴重な経験でした。授業見学をさせていただいた際には、活気のある学習者と学習者をまとめる教師の良い関係性が伝わり、いつか自分もこんなクラスを持てるようになりたいと強く思いました。
S.N.（国際教養大学）